



5. 蔵選屋さんの制服もイルサルト製。デニムシャツにエプロン、お店の世界観に合わせて自然なイメージを大事に選ばせていただきました 2. 岡崎のご当地ビールもさまざま。私も頂きましたがどれも美味しい! 3. 蔵選屋を応援する人のネームプレート 4. 尾崎さんが細部までこだわったちよいモテおやじのための空間 5. この空間で今後どんなドラマが生まれるのか? 楽しみでなりません

すが、太陽のようにキラキラ照らすのではなく、月の明かりのように優しくお客さまに寄り添い、足を照らしたいという思いをこめていました。この考え方は今も変わっていませんが、現在の経営理念は数年前に「心と体を健やかに」というものに変えております。お客さまは40代〜60代の中高年の男性の方が中心です。20年間お店をやっていると当時30歳だった方が今は50歳近くになっています。時代もお客様も変わっていますが、この20年間にたくさんのビジネスマンを足元から支え、日々の活力がすこしでもあがるように応援をしつづけてきました。しかしバブルの後、失われた30年と呼ばれ、仕事をしてもあまり報われる感がなく、それでも頑張ってきたのに、なんとなく邪魔者扱いをされて「最近では中高年の社員さんのことをいるのだからいいのだからわからない存在として妖精さんと呼ばれているんですよ」とテレビでキャスターが半笑いで言っているのを見たときに、怒りがこみあげてきました。

日本の未来のために ちよいモテおやじを増やす

でも、おじさん世代がそうやってくすぶっていたり、若い人との断絶を「それでもよい」と受け止めていけばいいほど、日本から元気がどんどん失われていくと感ずるのです。

なぜなら、若い人は近くに尊敬する相手も、目標とする相手もいません。だんだんと未来に希望が持たなくなっていくわけで、それで未来の日本が良くなるわけがないと考えています。本来40代・50代といえは最も脂が乗ってきてバリバリ仕事ができる年代です。

これくらいの年齢の方が元気になつていくことは、日本が元気になることにそのまま直結するのです。そんな折に、私が尊敬するある経営者の人から「娘から2年間口をきいてもらえなかった」という話を聞き「けっこうそういう人いるよ」と言われたときに、本気で

なんとかしなければいけないと思ったのです。

いまオンライン上では若者の教祖とも言われる人たちがちょうど極端な(そして耳障りの良い)意見を毎日発信して人望を集めています。彼らは勉強量もすごいし、言っていることに説得力もあります。だから彼らのことはまったく否定をしません。本当は身近なおじさんたちがその役割をすべきだと思うのです。本来それくらいの力は持っているはずなんです。「けど若者たちに受け入れられないのはなぜか?」なぜかという若者が話を聞く以前に、おじさんたちの好感度が高くないからです。はつきりいうと低いんです。「ボロは着ても中身は錦」という言葉はもはや死語で、若い子たちからすれば見た目や第一印象が悪ければその先に進むことはできないのです。多くのおじさんたちは非常に高いポテンシャルを持っているにも関わらず、見た目だけの印象でそれを活かすことすらできず、スタート地点にも立たせてもらえていないのです。

それだったらリーガルで20年以上の経験を持つ私が、足元だけじゃなく、おじさんたちを中も外も輝かせて、すくなくとも相手に嫌われないように、「いや、さらに好感度を高めて「ちよいモテおやじ」にしてやろうじゃないかと。そしてこのちよいモテおやじが増えれば確実に未来の日本が良くなるわけで、そんな「ちよいモテおやじ」のたまり場を作って、日本のために貢献してやろうじゃないかと蔵選屋を立ちあげる決意をしました。ちなみにちよいモテおやじというのは「この人の話を聴きたい」「この人と話をしたい」と周りから思われるような中年のことです。目指すべき目的は「日本の未来のためにちよいモテおやじを増やす」。めちゃモテではなく、ちよいモテなのが大事なところ。女の子を両脇にかかえてウハウハ状態をめざすのではなく、ちよいモテのおじさんで若い人から「将来ああいう人になりたいわね」と憧れられる存在であること。そのためには第一